

世報 報 報



目次

●巻頭言「私の焼き物」 気仙医師会 会長 うのうらクリニック 院長 鶴 浦 哲 朗… 2	特別講演「CKD診療の新たな展開：地域でどう診るか」 岩手医科大学医学部内科学講座 腎・高血圧内科分野 教授 旭 浩 一
●理事会報告 …………… 3	(糖尿病関係)
■令和6年度第3回理事会報告 …………… 3	座長：岩手県立大船渡病院 副院長 久 野 良 徳 彦
■令和6年度第4回理事会報告 …………… 4	特別講演「2型糖尿病合併CKD治療の進歩」
●随 想	岩手医科大学医学部内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌内科分野
「LOH症候群の陥穽」	教授 石 垣 泰
岩手県立大船渡病院 参与 氏 家 隆… 6	●令和6年度小児科救急医師研修会【岩手県医師会委託事業】…11
岩手県立高田病院 副院長 大 木 智 春… 7	「食物アレルギー最近の考え方と対応・Take2」
●研修医日記	独立行政法人国立病院機構 盛岡医療センター
岩手県立大船渡病院一年次研修医 犬 塚 一 誠… 8	統括診療部長 佐々木 美 香
●気仙学術講演会【令和6年度糖尿病性腎症疾病管理強化対策事業】… 9	●会員の異動 ……………12
(腎関係)	●事務局日記 ……………12
座長：岩手県立大船渡病院 参与 氏 家 隆	●編集後記・表紙のこぼれ ……………14
一般講演「当医院におけるCKD治療」	
岩手県立大船渡病院 泌尿器科 医長 玉 田 伸 治	



第168号
2024. 12. 25

気仙医師会
岩手県大船渡市盛町字内ノ目6-1
TEL:0192-27-7727 FAX:0192-26-2429
<http://kesen-med.or.jp/>

言 頭 卷



「私の焼き物」

気仙医師会 会長
うのうらクリニック 院長

鷗 浦 哲 朗

私は栃木県にある、ある窯元に属している。一門は総勢12名、当主は陶歴40年の県を代表する陶芸家であり、自宅の窯は長さが10メートルの穴窯である。

今は年1回、9月に作品を持ち寄り、当主の窯で一門の作品を焼き上げている。当主は自分の作品の準備のほか、本焼きの前に一門の作品の素焼きもする。本焼きは、兄弟子たちがシフトを組み、10日間寝ずに火の当番を行う。薪が絶え間なくくべられ、窯の温度は終盤の攻め焚きの時には1280度まで上がる。火が窯の中を縦横無尽に駆け巡り、陶器はその高温故にガラス質に変化して、橙色に透明になり、窯の奥まで見通せる様になるらしい。それは素晴らしく幻想的で感動ものらしい。実は、まだ私は攻め焚きの時を経験していない。それ故に伝聞なのである。

今年は、9月初めに作品の窯詰めの際に窯を訪ねた。流石に栃木県は遠く、大船渡から往復10時間のドライブでは、何度も訪ねることが出来ず、作陶の全工程を未だ体験できていないのは、残念極まりない。来年は、窯止めの日に合わせてスケジュールを組み、荒れ狂う炎の中に怪しく立ち並ぶ作品を目撃しようと思う。

今年の窯を預かる二番弟子が、薪をくべる小さな穴から窯の中に入り、大小800もの一門の作品を窯詰めしていく。実はこの窯詰めが、焼成の工程の肝であることを教えられた。作品が壁になり、炎の行く手を遮るのである。どの大きさの作品をどこに置くかにより、炎は作品を迂回して、上に登り、右にあるいは左に曲がる。全ての作品の表面を舐め尽くす様に窯の中を駆け巡り、そして煙突から轟音とともに火柱となって立ち昇る。この炎の道筋を、作品の並びによって決定するのである。上手く壁になると、炎は効率よく作品を焼き上げる。炎の流れが良すぎると熱は無駄に失われるし、流れが悪いとムラが出る。

今年窯詰めが4回目の二番弟子は、全ての作品の配置を設計して、密室の中でコツコツと、倒れぬ様に、くっつかない様に、滴り落ちる汗を物ともせず、屈み過ぎてちょっと腰痛になりながら、緊張しながら、作品並べの手を進めた。当主は、窯の外で中の様子の報告を聞きながら、暖かく声を掛ける。そうやって、丸二日間をかけて窯詰めは終了した。今年は、間近に観ることで、窯詰めがいかに重要で、いかに大変な作業であるかを知った。

私の焼き物はまだニコイチである。これは2個分の材料で1個の作品しか作れていないという、師匠の指導である。器の生地が十分に薄く伸びていない。底が厚くてずっしりと重い、毎日の使用で腱鞘炎を起こしてしまう代物である。みかねた師匠が、この冬に出張指導に来てくれることになった。週末3回も行けば何とかなるだろう、と師匠は言う。

年末を迎え私の来年の目標は、腱鞘炎にならない湯呑の作成と、幻想的な攻め炊きの窯を観に行くことである。師匠のお許しが出たら、晴れて窯元の名前を公表しよう。

随 想

「LOH症候群の陥穽」

岩手県立大船渡病院

参与 氏 家 隆

畏友からLINEが来てこう言われました。「お前は退職しても仕事ができたらやましい。」

年を取るということは、まさしく変化することであります。動的平衡の退化は、すなわち自律神経の退化、運動神経の退化です。ぐっすり眠れない、夜に何度も起きる。速く走れない、歩くと躓き、更に人生に躓く。因果な職業を長く続けてきました。それでも前へ進まない寝たきりになります。

今、自治体病院はどこも大変な赤字で、働き方改革と併せ、大変困難な状況に直面しています。どこの自治体病院もその経営効率が批判的になっております。しかし、その背景には日本の診療報酬が高次医療やチーム医療に十分な評価や配分を与えていないという問題があります。市場経済的な経営効率というものさしで自治体病院の本来の役割や現状を把握するのはベクトルが異なるのでしょうか。また、岩手県では震災後の時点で、人口の動態や地域の復興に合わせた抜本的な改革を模索すべきだったと考えます。このようになるのであろう状況は、ある程度予測がついていたにもかかわらず、さらなる非効率と現状に繋がる数々の伏線があったように思えてなりません。

場当たりの判断にはやはり常に危うさが伴うものです。地域医療を担う中核病院は、いわゆる社会的共通資本であり、利益を度外視しろとは言いませんが、地域住民の命を見据えた改革こそ必要と思われれます。あえて言えば、その存在こそが地域社会の安定した基盤であります。もちろん組織改革や体制の充実は必要でしょうが、経営効率優先でネガティブな改革ばかりでは、ますます医療現場は荒廃の一途をたどるでしょう。世の中の事象には表と裏があって、往々にして真実は裏面にあることが多い。そして決断は決めるより断つことが重要であります。

さて、フィンランドでは保育園で学ぶことの第一は、友達を作るスキルを学ぶことだそうです。なんだそんなことをと一瞬訝っては見たものの、同級生は見分けがつかない容姿に変容し交流も途絶え、鬼籍に入った方も少なからずおります。もちろんこの年では、友達を作ろうにもなかなか出会いも勇気もありません。そんなものいらないと強がってみても、家族に生半可に扱われたりすると寂寥感が積もります。協調性や根気も、ましてやフィジカルは言うに及ばず、訓練を重ねなければならない技術なんだということを思い知らされます。それは、人格の問題ではなく、解決するための磨くべき技術であり、死ぬまで練習が必要ということでしょうか。コミュニケーションとは、わかりあうためのものというより、わかりあえなさを互いに認め合い、ともにそこに在ることを受け入れるためのテクニックであり、そのことを理解し日々鍛錬していくことが肝要と思われれます。思春期などは特にそうでしょうが、根拠があろうがなかろうが、ヒトは自分がどんな人間なのかを知りたいのです。みんな自覚しているはずですが、自分のことは最も知らないのが自分自身です。今まで何をきて、どんな趣味があって、どんな嗜好か。それさえも失念するのが年を取るということです。

過日、妻と『月』という映画を見てきました。ヒトは、だんだん役に立たなくなり、それを自覚する辛さと言ったらありません。自覚できない自我という存在は、周りの人に迷惑をかけ放題です。どうしてもできないのです。欲しいものは手に入らず、そして残念ながら当たり前のように大切なものはお金では買えません。価値観が同じ相手などいるはずがないのに、一瞬の勘違いが一生ついて回ります。愛の本質はつかの間の永遠です。妻、そして家族、実は面倒な存在ですが、その面倒くさい関係にこそ救われるものがあります。そして、家族や真の友達だけが「風邪なんか、うつたって平気だよ。」って言ってくれる人なのです。ヒトは知らないものを深く愛することはできます。でも、愛さないものを深く知ることはかないません。

老害の三徴は説教と愚痴、そして自慢話であります。映画『アフリカの女王』でキャサリン・ヘップバーンは、ハンフリー・ボガードに、「本性というのはこの世で私たちがそれを克服するために与えられたものなのよ。」と言っておりました。老人の矜持など木端微塵に砕け散ってしまいます。私は長く医療安全を担当してきましたが、医療もそして人生も瑕疵の連続でした。おそらくそれぞれに間違っただけに生を受け、間違っただけに入学し、間違っただけに職業を選んで、間違っただけに相手と結婚し、間違っただけに人生を送ることになるのです。そして、その存在の耐えられない軽さに打ちひしがれ、灰燼に帰してゆくのでしょうか。人生は勝ち負けではありませんが、世の中には意味のない勝ちもあれば、意味のある負けもあります。

結婚式のあいさつを頼まれるとよく口にするのですが、愛するとは、持っていないものを与えることです。そして、この世界は"違い"でできています。子どもほど思うようにならない愛はありません。私の専門はオンコロジーですが、年老いていくということはアポトーシスみたいなものなのでしょう。夫婦もだんだんアナザーになってきます。我々はマイクロバイオームと同居しており、それこそが免疫の要であり、これなしでは生きていけません。大切なものが目に見えないように、いつ攻撃を仕掛けてくるのかもわからないものと同居しなければ、ヒトという生き物は生きてはいけません。

以上、LOH症候群、男性更年期障害のつぶやきでした。

今年の性機能学会に出席して私が親炙するLOH症候群の泰斗の講演を拝聴した折、テロメアを長く保つには、テストステロンを鼓舞するには、ビタミンDとZnの摂取が大切と話しておりました。それには、毎日サケひと切れと魚介類の摂取を勧めておりました。しかし、最近は震災後から摂取が困難になってきております。また、近年、ウクライナといえ、ガザといえ、戦争という話題が連日心に刺さってきます。ストレスは男性更年期障害の最大の敵だそうです。ある本の中に、「人間として知るべきことは生き残ることと殺さないこと以外にはありえない。人間はそのことさえ知っていれば足りる。老人は、生き残ることの善さと殺すことの罪をすでに知っている。」とありました。更には、「延命治療の実施や不開始、中止等にかかわる制度化は、それがどのような形式であろうとも端的に不必要である。」医療が率先して制度化に貢献し、それが実は医療者自身の救済のためであることを隠蔽し、病人のためであるかのように振舞うことは不潔である。」と。なんともやりきれない職業と意識せざるを得ません。

だからこそ、私は周りに助けてもらわないと生きていけない自信があります。ヒトと何かを分け合うことこそが、人間に許された幸せの形だと感じている今日この頃です。幸せはいつもすぐそばにあります。



岩手県立高田病院

副院長 大木 智 春

全く早いもので陸前高田市に来て今年で22年目になりました。本設の高田病院が完成してからもすでに6年目になります。市中心部のアパッセ周辺の景色も見慣れてきたせい以前より違和感が薄れてきました。震災後ようやく新しい陸前高田市を受け入れられる気持ちの余裕が出てきたのかもしれませんが。

前回、気仙医報の原稿を書いたのが2019年でCOVID19が流行する前でした。その時は体力維持のために卓球をしていましたが、COVID19が流行してからはソーシャルディスタンスのこともありもっぱらウォーキングをしています。病院公舎からアパッセを右手に見ながら川原川沿いの遊歩道を通って海岸までの道を往復します。距離は往復約6キロメートル、時間にして1時間10分くらいです。海岸に向かって歩いていくと右前方に1本松が見え、帰りは正面に氷上山が見えます。毎日ほぼ同じ道を歩くのですが、春夏秋冬変化もあり、また日々小さな発見もあります。春には新緑の木や草の葉、夏には青空に浮かぶ入道雲、秋にはコオロギの鳴く声、冬には雪化粧をした氷上山が見られます。防潮堤に上がると松ぼっくりから芽を出した若木が2.3メートルくらいの高さまで育っているのがわかります。100年くらい経れば立派な松林になることでしょう。

高田松原が再生したときに陸前高田市はどうなっているでしょうか。人口は今よりもっと減少しているかもしれませんが、たとえそうであっても災害に強い、小さくても住みやすい街であればいいと思います。そんなことを思いながら日々歩いています。本市が住みよい街になるためのお手伝いももう少しできるように頑張りたいと思います。そのためには体力を落とさないことが大切だと最近、実感しています。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

研修医日記

岩手県立大船渡病院 一年次研修医

犬塚 一誠

大船渡病院1年次研修医の犬塚一誠と申します。出身は長崎県佐世保市です。高校卒業後、浪人生活を経て岩手医科大学に入学し、卒業後に大船渡病院で医師としての生活をスタートさせました。

大船渡病院での初期研修を希望した理由としては、早く一人前の医師になりたいと考えていたからです。そこで研修医の裁量が大きく、上級医の先生方からしっかり指導して頂ける環境に身を置きたいと考えていたため当院を選択しました。

大船渡病院は指導医と研修医との距離が近く、相談しやすい環境となっており、病院全体もそうですが、研修医同士の雰囲気がとてもいいので、楽しく研修医生活を送っております。

研修医としての生活が始まって早くも半年以上が経過しました。最初のころは患者さんに会いに行くことさえ緊張し、うまくしゃべることができず、上級医の先生に笑われたことを覚えています。半年以上経過した今でも緊張しっぱなしではありますが、少しずつできることが増えてきたと感じています。

研修医生活で精神的にも体力的にもつらい業務はやはり当直です。大船渡病院は三次救急で気仙地域全体の医療を担っているため、ウォークインの人数や救急車の数も多いです。

そのため、ひとり一人に漏れなく、そして素早く必要な検査をオーダーし、緊急疾患を見逃さない能力が必要となってきます。最初の当直で患者さんに怒鳴られたときはこれからの医師としての生活に不安を感じたのを覚えています。しかし、月に数回の当直をこなすことで、患者さんへの話し方、必要な検査や対応などが少しずつ分かってきて、最初のころよりも多くの患者さんを一人で診ることができるようになってきたと感じており、成長を実感できるようになってきました。

気仙地域の皆様は穏やかな方々が多く、研修医がファーストタッチで診察することや手技を行うことを快諾して頂けるため、地域の皆様に育ててもらっていると実感しております。

医師になって学生の頃よりは自由が少なくなり、忙しい日々を過ごしておりますが、幸い周りの環境にも恵まれており、充実した毎日を過ごせているため、これからもメリハリをつけて過ごしていこうと思います。

最後になりますが、これからも気仙地域の医療に貢献できるよう日々精進して参ります。

まだまだ、できないことばかりではございますが、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

気仙学術講演会

【令和6年度糖尿病性腎症疾病管理強化対策事業】

岩手県糖尿病性腎症重症化予防プログラムの実践事業の一環として岩手県医師会から受託している本事業について、令和6年度は、二つの講演会事業を開催いたしました。

本事業は、糖尿病は適切な治療を受けない場合重症化するリスクが高いため、新たな受診者、診療中断者について、関係機関等からの受診勧奨や保健指導を行うことにより治療に結びつけることや、糖尿病専門医以外の医療機関にも糖尿病患者の早期発見に協力いただき、重症化が懸念される患者については専門医に紹介するなど、関係機関等と連携し腎不全、人工透析への移行を防止することを目的として行っているものがあります。

【腎症関係】

◎ 開催日：令和6年10月29日（火）19時00分～

◎ 会場：大船渡プラザホテル（対面+WEB形式）

腎症関係の講演会は、岩手県立大船渡病院参与氏家隆先生が座長を務められ、一般講演では岩手県立大船渡病院泌尿器科長、玉田紳治先生から「当院におけるCKD治療」と題して、また、特別講演では、岩手医科大学医学部内科学講座腎・高血圧内科分野教授旭浩一先生から「CKD診療の新たな展開：地域でどう診るか」と題して講演をいただきました。



玉田紳治先生は、血糖、血圧、脂質のコントロールと合わせて、RA系阻害薬、MRA、SGLT2阻害薬などを用いた薬物治療がCKD進行の抑制に有用であることを述べられておりました。

旭浩一先生からは、①CKD対策の潮流②CKD診療の考え方③CKD診療における新規薬剤のエビデンスと位置づけ④CKD診療の諸課題とSGLT2iについて詳しく説明をいただきました。参加者は、医師、薬剤師、行政担当職員等35人でした。



【糖尿病関係】

◎ 開催日：令和6年11月13日（水）19時00分～

◎ 会場：大船渡プラザホテル（対面形式）

糖尿病関係の講演会は、岩手県立大船渡病院副院長久野良徳彦先生が座長を務められ、岩手医科大学医学部内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科分野教授石垣泰先生から「2型糖尿病合併CKD治療の進歩」と題して講演いただきました。



石垣先生からは、①糖尿病性腎症病期分類の改訂②SGLT2阻害薬内服と腎イベントの発症関係③CKD治療におけるSGLT2阻害薬の使用に関するフローチャート④CKDにおける糖尿病管理に関するKDIGO2022推奨事項と臨床的ポイント⑤GLP-1 RAの試験のメタ解析⑥日本人2型糖尿病における血糖、血圧、脂質の集学的管理による合併症抑制の検討⑦糖尿病関連腎臓病（DKD）の治療について、詳しい説明がありました。

参加者は、医師、薬剤師、看護師、行政担当職員合わせて38人でした。



令和6年度 小児科救急医師研修会

【岩手県医師会委託事業】

「食物アレルギー最近の考え方と対応・Take 2」

独立行政法人国立病院機構 盛岡医療センター 統括診療部長 佐々木 美香 先生

令和6年11月22日（金）18時30分より岩手県立大船渡病院3階大会議室にて、令和6年度小児科救急医師研修事業ブロック別医師研修会が開催されました。司会は、総務部長鳥羽有先生、講師は、独立行政法人国立病院機構盛岡医療センター統括診療部長佐々木美香先生に「食物アレルギーの最近の考え方と対応・take 2」と題し講演いただきました。佐々木美香先生は、年々アレルギー体質の子どもが増加していることやその原因食物について、以前は卵・牛乳・小麦であったものが、

これらに替わって木の実、ナッツ類が多くなってきていること、岩手では昔からの食文化でクルミを食べることが多く、他の地域よりクルミでアレルギーを引き起こす子どもが多いこと、特にナッツ類はアナフィラキシーショックを引き起こすため非常に危険であること、また、アナフィラキシー症状で最も気を付けなければならないことは、呼吸と神経の症状を診ることが大事で声のかすれや鼻水、くしゃみなどが出ているか確認が必要である。更に、エピペン効果は15分～20分程度で消失するため、心配せず、ためらわず打つことが必要であるが使用は1回だけなので失敗は許されないことなど様々な事例を紹介しながら講演いただきました。参加者からは現場での対応方法などについて質問が出されるなど、大変有意義な講演でありました。参加者は、医師、薬剤師、看護師、消防署救急隊員、合計46人でした。



- 10月3日(木) 特定健康診査協力依頼に係る医師会長説明(うのうらクリニック):大船渡市健康推進課
佐藤主幹、金野保健師、事務局
- 10月5日(土) 第2回岩手県医師会理事会(岩手県医師会館):岩淵正之理事
第2回郡市医師会長協議会、岩手県医師連盟執行委員会(岩手県医師会館)
:鶴浦哲朗会長、岩淵正之理事
- 10月12日(土) 岩手県医師会産業医研修会(岩手県医師会館・気仙医師会館(サブ会場)):4人受講
- 10月16日(水) 令和6年度第4回理事会(気仙医師会館・対面+WEB):14人出席
大船渡市から特定健康診査事業に係る医療機関協力説明会:大船渡市保健福祉部健康推進課
佐藤かおり主幹、こども課新田係長他
- 10月17日(木) 日本医師会主催によるMAMIS操作説明会(WEB)(気仙医師会館):事務局
- 10月19日(土) 第149回岩手県医師会勤務医部会幹事会及び二戸医師会・久慈医師会勤務医部会委員懇談会
(二戸市パークホテル):中野達也幹事、阿部啓二幹事
- 10月22日(火) 気仙学術講演会「腎症関係」協力メーカーとの打合せ(気仙医師会館):事務局対応
第4回理事会報告発送、令和6年度小児科救急医師研修会開催案内発送
- 10月23日(水) 気仙学術講演会「在宅医療人材育成関係」協力メーカーとの打合せ(気仙医師会館)
:事務局対応
- 10月25日(金) MAMIS利用事務局合同説明会(WEB):事務局対応
- 11月5日(火) 令和6年度気仙地域県立病院運営協議会(岩手県立大船渡病院):鶴浦哲朗会長
- 11月7日(木) 令和6年度岩手県医師会生涯教育委員会(岩手県医師会館):阿部啓二委員
- 11月8日(金) 第58回郡市医師会事務局研修会(岩手県医師会館):事務局
- 11月9日(土) 令和6年度岩手県糖尿病対策推進会議総会(岩手県医師会館):糖尿病担当・遠藤稔弥先生
- 11月12日(火) 岩手県教育委員会と岩手県医師会及び岩手県予防医学協会との協議会(岩手県医師会館)
- 11月20日(水) 令和6年度岩手県保健医療功労者表彰式及び岩手県地域医療従事者感謝状贈呈式(エスポワールいわて):鶴浦章先生
- 11月24日(日) 第153回岩手医学会秋季総会(岩手県立大船渡病院)
- 11月25日(月) 令和6年度気仙地域労働災害防止団体代表者連絡会議(大船渡労働基準監督署)
:高淵コーディネーター
- 11月28日(木) 令和6年度気仙地域産業保健センター運営協議会(気仙医師会館):石倉功一産業保健部長、寺澤・高淵コーディネーター
- 11月30日(土) 令和6年度岩手県医師会産業医実地研修会(岩手医大矢巾キャンパス)

●●● けせん医報へのご投稿募集 ●●●

本誌は、気仙医師会の広報誌です。年3回、4ヶ月ごとに発行しております。
会員の皆様や本誌をご覧になられた方からのご投稿をお待ちしております。
セミナーや勉強会、各種医療活動、思い出、エピソード、感想、トピックスなど、
ご自身が掲載を望むものがありましたら、是非、ご投稿下さい。お待ちしております。

気仙医師会広報部 部長:吉澤 徹
事務局担当:寺澤、高淵

TEL:0192-27-7729

FAX:0192-26-2429

E-mail:mail@kesen-med.or.jp

編 集 後 記

新型コロナ感染もインフルエンザも流行していて、なにかと忙しい時期に執筆して頂いた先生方へ、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

今回のけせん医報は、書いて頂いている先生方の、年齢の対比が分かる面白い組み合わせの内容になったと感じました。

年齢を重ねる事で理解が深まってより良く出来ることもありますし、逆に歳を取る事できなくなってくることもまた増えてくるものだなあと50歳の自分にも染み入るようなお話でした。

個人的に、いつもとても面白いと感じながら読ませて頂いている研修医日記ですが、これまでは二年次の研修医の先生方をお願いしていました。今年は研修されている人数の関係で、お忙しい中で一年次研修医の犬塚先生に書いていただきました。二年次の先生達のお話ともまた少し違った内容で、自分の一年次の研修医の時を思い出してとても新鮮な気持ちになりました。

世界各地での紛争は長く続いており、その影響で物価が上がったりまだまだ大変な状況ではありますが、ロサンゼルスドジャースに移籍した大谷選手が指名打者に専念してもメジャーリーグ史上初の記録を達成し、またワールドシリーズでもチームが優勝するなど、同じ岩手県民として大変嬉しい明るいニュースもありました。また、陸前高田市出身の佐々木朗希選手もメジャーリーグへの移籍が報じられるなど、将来の楽しみもあります。

これからも皆様と一緒に、元気に歳を重ねていけると良いなと考える年の瀬です。

〈T.Y〉

表紙のことば

昭和14年に開業した岩手開発鉄道の列車です。旅客事業と貨物輸送も兼ねておりましたが、平成4年に旅客事業を廃止、現在は岩手石橋から赤崎駅まで11.5キロメートルセメント会社へ原料となる石灰石を一日約18往復運んでおります。

晩秋のこの日、赤く色づいた柿の木の脇を力強く駆け抜けて行きました。

(写真提供：村田プリントサービス)